

## 論文の要旨

本論文は、日本語教育現場での疑問をもとに、現代日本語クライの意味・機能及び類義表現との使い分けを研究したものである。研究方法としては、コーパスとアンケートの併用という新たな手法を取り入れた。それにより、従来の直観・作例による判断をできる限り排し、客観的な観察・分析を試みている。また、日本語研究で得られた成果を教育現場に還元するという、日本語教育への応用を視野に入れた研究を目指すものでもある。

まず、序章で本研究の目的、対象、背景について述べる。

次に、第1章では、本格的な分析に先立って、クライの用法を概観する。クライをめぐる言説、クライの品詞の範疇並びに「程度用法」に関する本研究の立場を述べ、クライの統語的特徴についても言及する。クライの品詞の範疇としては、現在、「とりたて助詞」が主流となりつつあるが、クライにはとりたて用法（例…「掃除くらいしなさい」）以外に、程度用法（例…「声も出ないくらい驚いた」）、概数用法（例…「5分くらい」）があることから、この範疇に入れるのは不相当だと考え、本研究では、クライは「副助詞」とすることを述べる。また、本研究での程度概念は、数量概念、頻度概念を内包するものとし、程度用法とは主文の事態の程度を具体的な話や比喩を例示して説明するものであるとすること、そして、その程度の高さについては、高程度、非高程度（低程度、中立）という用語を用いることも述べる。

第2章では、「クライは様々な程度を示す」という先行研究に対する批判を基に、クライの表す程度と構文との関係について論じ、構文上のクライの位置によってその表す程度は異なることを示す。すなわち、副詞的修飾成分にクライが位置する「XクライY」（例…「広辞苑くらい厚い」）の示す程度は高程度に偏るが、連体修飾成分の「XクライのY」（例…「広辞苑くらいの厚さ」）は概数量を表す用法となり様々な程度を表すこと、述語成分の「《Y》+Xクライだ」（例…「山頂はとても寒くセーターがほしいくらいです」）は、文脈によって程度の高低を評価する場合もあれば概数量を示す場合もあるといったように、どのような程度をも表すことができることを、コーパス及びアンケート調査を用いて示す。さらに、クライの補部の内容は、聞き手と共有できる知識の範囲内であることが要求される、ということについても述べる。

第3章では、クライニ、クライガ等のクライの助詞後接形「クライ+α」について論じる。先行研究で「クライは様々な程度を示す」とされてきた要因は、助詞後接形「クライ+α」と、何も後接しないクライが一括りで議論されてきたことにもあると指摘し、現在、「同義」と見做されているクライとクライニについても、両者は異なるものであり、分けて議論する必要があることを主張する。さらに、クライとクライニは、同じ副詞的修飾成分に位置していても、助詞を後接しないクライ（例…「哺乳瓶で喉が潤うくらい飲ませましょう」）は副詞的用法であり、程度の甚だしさを表す「高程度呈示用法」となるが、クライニ等、助詞を後接するクライ（例…「哺乳瓶で喉が潤うくらいに飲ませましょう」）は名詞的用法で

あり、概数量を示す「概数量呈示用法」となることを示す。

第4章では、類義表現であるホドとクライの比較を行う。ここでは、ホドとクライの名詞性に着目し、先行研究を参考に、名詞性判断テスト並びにコーパス、アンケート調査を行い、両者の名詞性を比較する。そして、クライは名詞的用法を有しているのに対し、ホドは名詞性が薄く、副詞的用法が主となっていることを示す。そして、ホドに比べ、「様々な程度」を表すことができるのは、クライは程度の高を表す副詞的用法と、概数量を表す名詞的用法の両方を有するためであることを改めて主張する。さらに、ホドとテイドの使い分けについても述べる。

第5章では、もう一つの類義表現であるテイドとの違いについて論じる。テイドに関する先行研究は2件に留まり、詳細な調査・分析は本研究が先駆けとなると思われる。そして、テイドには高程度を示す副詞的用法が見られず、低程度に偏ることを、コーパスを用いて示す。また、テイド、クライ共に低程度を表すが、テイドは話し手の否定的な感情・評価的意味が含意される(例…「お宅にも、この程度のお坊ちゃんがいらっしゃいますよね」)ことが多いこと、クライには概数量を呈示する用法があり、テイドのように強い否定的評価にはなりにくいことを示す。さらに、テイドは否定辞を補部に持ち、話し手が適切と見做す限度を設けて、その範囲内に事態を留めるという話し手の要求的意味を表す用法(例…「過労死しない程度に働いた」)が見られることを示す。

第6章では、クライのもう一つの主たる用法である、とりたて用法について、評価に関わるクライと、限定に関わるクライとに分けて分析・考察する。そして、評価に関わるとりたてのクライ(例…「ゆで卵くらい作れるよね」)については、主観を伴わない現象描写文には現れないこと、クライ文の意味には、「最低限」「実現可能性の高さ」のほかに、「実現期待事態の例示」があることを示す。さらに、クライ文の意味は、述語動詞の表現並びに話し手の発話形式と関連があることを主張し、それに基づいた新たな分類方法を提案する。また、限定に関わるとりたてのクライ(例…「親に連れていってもらっても、せいぜい近くの海か山くらいだ」)については、断定を避ける臍化性や低評価の意味も内在していることを示す。

終章では、各章の成果および研究方法の実践についてまとめる。そして、日本語教育への応用について述べ、従来、一括りに「程度」とされてきたクライを、概数量を表すクライと、高程度を表すクライとに分けて指導することを提案する。類義表現であるホドとテイドとの使い分けについても述べる。最後に、本研究の意義として、程度用法を中心としたクライの意味・機能の解明、新たな研究手法の開拓、そして、教育現場と研究領域との相互乗り入れの可能性の示唆、という3点を挙げ、今後の課題を述べる。